

# 平城宮跡第110次発掘調査現地説明会資料

昭和53年9月30日

中村友博

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部は、東院の東南地区を第110次の発掘区に設定して、7月1日より調査を開始した。現在、調査は継続中である。調査面積は2100㎡。この地点は、北から延びる低丘陵がちょうど平地に移る移行部分にあっており、「楊梅宮」跡と推定される現在の宇奈多理神社の東に位置する。発掘区の南は、第44次（昭和42年）と第99次（昭和51年）の調査で明らかになった園池SG5900A・Bをのぞみ、東は宮城の東面大垣である。今回の調査の目的は、この園池の北側の地区の性格を明らかにすることである。

## 遺構の概要

調査の進行にともなって、大規模な整地が行われていたことが明らかとなった。旧地形は西北から東南に下がるため、単一の整地が行われたわけではないが、おおむね東南部に厚く、西北部に薄く盛られている。この整地土を基準にして、造営期を大きく2時期に分け、整地以前の遺構をさらに2時期、計3時期に大別することが出来る。この整地土から出土する遺物は天平末年から天平勝宝年間のものであり、この時期にこの地区の大規模な造営が行われたものととらえられる。現状で、明らかとなった遺構について述べよう。

**A期** SB01 桁行9間、梁行3間（3m等間）の南廂つき東西棟礎石建物。調査区の中央や、や南部分にある。

SB02 桁行3間、梁行2間（3m等間）の東西棟礎石建物。調査区の西南部にある。径1mほどの長方形の掘形と根石が残る。

**B期** SB03 桁行5間、梁行2間以上（3m等間）の掘立柱建物。調査区の西南隅にある。棟筋が、平城宮の造営方位と大きく違うことが特徴である。このことは旧地形もしくは園池との関係を考慮したことによるものと思われる。

SB04 桁行6間以上、梁行3間（3m等間）の東西棟掘立柱建物。調査区の西北にある。

SF05 幅1.5mの東西方向の石敷通路。調査区の南部にある。路面に小石を敷き、北側に幅0.4mの石組み溝をもつ。この溝は、西で西南方向に折れ曲り、調査区外に続く。発掘区中央部で屈曲し、東端で南に折れ、発掘区外に延びる。路面は西に高く、東に低い。

**C期** SA06 東西方向の塀。柱間は3m等間で12間分検出した。調査区の中央から、やや南にあり、東端は南北方向の柱列にとりつく。柱根を残すものが多い。

SB07 桁行3間（3.3m等間）、梁行2間（2.7m等間）の東西棟礎石建物。調査区の南にある。西妻柱に、転用された凝灰岩礎石が残る。

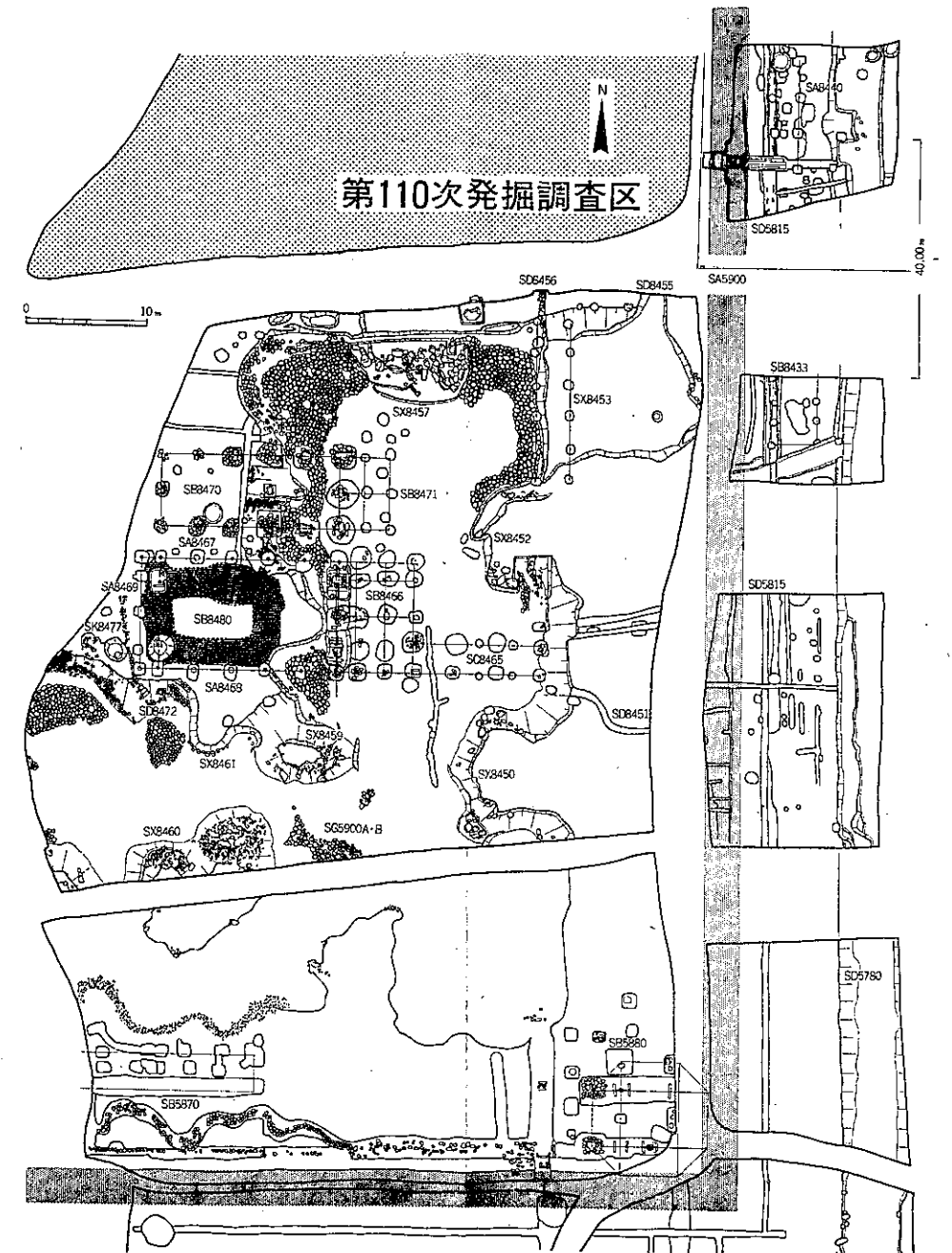
SB08 桁行5間（3m等間）梁行4間（2.7m等間）の東西廂付き南北棟掘立柱建物。調査区の東北にある。

SF09 東西方向の石敷通路。北側に石組みの溝をもつ。路面は西に高く、東に低い。北溝はSB08の南雨落ち溝である可能性が高い。

C期に、SA06の存在によりこの地域が南北に区画されて使われたことがうかがえる。

## 出土遺物

SF05の南辺から多量の瓦類が出土した。平城宮第Ⅱ期と第Ⅲ期の時期の瓦を中心とする。他に、緑釉埴が2点出土した。土器類は整地土から出土する。きわだったものとして、中国産の壺と鳥形の硯がある。



東院東南隅遺構図（第44・99次）

# 平城宮跡第二〇次発掘調査遺構図

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

